気候危機と『グリーン・ニューディール』

8 月半ばというのに、梅雨末期のような大雨が全国各地で続き、大きな被害をもたらしている。朝日 15 日は「経験のない変化 この先何世代も」などと、気候危機を特集している。

「これは人類に対する厳戒警報だ」。9 日、公表された国連気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の最新の報告書を、グテ―レス国連事務総長はこう評する。人間の活動のせいで、地球が温暖化しているのは疑いの余地はなく、熱波や豪雨、干ばつなど気候危機は続く。危機を和らげるのは、我々の選択にかかっている。

ここでは、写真の明日香壽川『グリーン・ニューディール―世界を動かすガバニング・アジェンダ』岩波新書、2021 年 6 月をすこし紹介したい。

表紙カバー裏から―気候危機をもたらした社会システムをチェンジし、コロナ禍からのリカバリーとジャスティスの実現をも果たす―米バイデン政権で加速する世界的潮流とは何か。

その背景、内容、課題を第一人者が徹底解説すると共に、日本で「2050 年カーボンニュートラル」を実現するための具体的な道すじや経済効果などを明らかにする。

終章の最後から―本書では、グリーン・ニューディールが生まれた背景を紹介し、具体的な内容も示し、課題も分析した。まずチェンジされるべきなのが新自由主義という社会システムであることも述べた。カーボン・バジェットやジャスティスについて説明し、残された時間はきわめて短い一方で、対峙する相手は巨大な権力を持つことも伝えたつもりだ。本章冒頭での人間の本質などに関する記述も含めて、状況は悲観的という印象を与えたかもしれない。

冷静に考えると、状況は悲観的であり、絶望的でさえあることを筆者は否定しない。事実を無視した根拠のない楽観主義の方が罪深いと思う。

ただ、20 年ほど前に、筆者が参加した日本の環境問題のシンポジウムで、医師として水俣病問題に深く関わった故原田正純先生が、「どんな絶望的な状況でも、必ず小さな希望がある」と語っていたのを思い出す。水俣病という深い闇をつぶさに見た原田先生の言葉だったので、とても重みがあった。今の時代で考えれば、その小さな希望が、Fridays for Future やサンライズ・ムーブメントの若い人たちであり、ウェールズの「未来世代法」だと思う。

私たちには、ガバニング・アジェンダとしてのグリーン・ニューディールという道具がある。多くの人が、システム・チェンジのために、その道具を手にとり、時には武器として使うきっかけに本書がなれば、著者としてこれ以上にうれしいことはない。

(2021 年 8 月 17 日)